

秀吉本陣周辺の城郭遺構確認調査について

西 尾 孝 昌

1. はじめに

「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平」の中で、鳥取城跡縄張調査を平成 19 年度から 20 年度にかけて実施し、ほぼその全容を把握することができた。本年度からは、本格的に、太閤ヶ平を中心とする鳥取城包囲の陣城群の調査を進めている。

調査は、中近世城郭の曲輪・堀切・土塁・竪堀・横堀などの遺構を表面観察し、主に巻尺・スタッフ（箱尺）などで計測を行い、縄張遺構図を作成した。調査担当は、鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文・坂田邦彦・細田隆博）と筆者である。

今回は、秀吉本陣と伝羽柴秀長の陣を中心とする、太閤ヶ平城郭遺構の調査結果を報告する。

2. 秀吉本陣の調査

秀吉本陣は大規模な土塁・櫓台で囲繞された方形の区画（内法＝東西約 58 m・南北約 58 m）で、さらにその土塁の裾を大規模な横堀がほぼ全周する堅固な要塞として周知されている。調査は特に、堀底からの土塁高と横堀の幅に注目して計測を行った（第 2 図）。

虎口は南側と東側の 2 ヶ所に設けられており、何れも平入り（土橋）である。南側虎口は幅 8.5 m・高さ 2 m を測る。南側虎口から土橋（幅 6 m）を渡ると、広い通路状の坂道が南西方向に下っている。通路幅は広いところで約 13 ～ 14 m を測り、大手道遺構と思われる。南虎口幅の広さ（幅 8.5）や虎口東西の突出部（東側の窪地状の出丸・西側の櫓台）を勘案すれば、南虎口が大手であろう。東側虎口は幅 6.2 m・高さ 1.8 m を測り、幅 3.5 m の土橋が取り付く。東虎口は規模的に南虎口よりも狭く、搦手虎口と認識できる。

南虎口から西側の櫓台 3 までは上りのスロープとなっている。櫓台 3 はほぼ方形で、東西 11 m・南北 11 m、高さ 4.5 m を測る。本陣土塁の中で 2 番目の高所（標高 249.2 m）である。

櫓台 3 から土塁を緩やかに下ると、櫓台 4 に至る。櫓台 4 は道路建設によって、横堀も含め既に破壊されているが、現状からすると櫓台 3 よりも規模が大きかったと思われる。鳥取城方面に突き出した天守台が想定できる。

櫓台 4 からほぼフラットで北東隅に至り、そこから南方向に進み東虎口（搦手）に至る。土塁の幅は上端で幅 3.6 ～ 4.2 m を測り、南虎口の土塁幅よりも規模が大きい。

東虎口から南方向に緩やかに上り、折れを多用した窪地状の突出部 5 に至る。土塁南端は標高 250.7 m を測り、本陣土塁の最高所である。窪地状突出部の内部は 3 段に分かれており、内法で東西 16 m・南北 31 m を測る。

窪地状突出部 5 の西端から緩やかに下ると、南虎口に至る。そこに立つと、南（大手）虎口と大手道に対して、櫓台 3 と窪地状突出部 5 の両サイドから横矢をかけることが出来ることに気付く。

横堀は当然のことながら土塁の塁線に沿って屈曲しているが、現状で幅 5.0 ～ 7.50 m を測る。表面観察で横堀が見られない、櫓台 5 南側や窪地状突出部南側にも当初は横堀を構築していたものと思われ、横堀は本陣全体を囲繞していたものと推察される。

3. 本陣周辺の城郭遺構

狭義の秀吉本陣は土塁と横堀で囲繞された曲輪 1 と曲輪 2 で構成されていたものと思われるが、曲輪 2 の広い空間は無線中継所の建設によって大幅に改変されているのではなかろうか（第 1 図・第 3 図）。

曲輪 1 を中心にして他の曲輪配置を考えると、次のような 2 つの見方ができよう。

①現状で、土塁と横堀の外側に帯状の空間 6・7・8・9（帯曲輪）を巡らせているようである。この帯曲

輪は、さらに北側にも続いていた可能性がある。

②本陣周辺は全体として、曲輪1を中心に、各尾根（A・B・C・D・E・I・G）に曲輪群を配置する「放射状連郭式」の縄張であることが分かる。

③そのように考えると、広い曲輪2の空間には、南（大手）虎口から延びる通路と同じような形態の通路が東（搦手）虎口から直線的に延び、その通路に沿って曲輪群が配置されていたことが想定される。そうすると、東虎口と直線的な通路をもつ曲輪群Gが繋がってくる。

④もう一方は、曲輪2に土塁囲みの空間を想定する見方である。天正6年(1576)秀吉の播磨攻めの本陣となった書写山（姫路市）には、土塁で囲繞された2つの曲輪が連結された遺構が存在する。それを参考にすれば、曲輪2に低い土塁をもつ広い空間が設定できよう。

次に各曲輪群（A・B・C・D・E・F・H・I・J・K）について、その特徴を記す。

<曲輪群A>

櫓台4から派生する急傾斜な尾根に構築された小規模曲輪群で、上段部と下段部からなる。上段部は13の小曲輪を連続させ、南側に一部土塁を設けている。下段部は8段程度の曲輪（最大は29×14m）が認められるが、谷筋の防御のためであろう。

<曲輪群B>

曲輪群Bは、細長い曲輪（44×11m）から4段程度の細長い曲輪が続き、他は13段の小曲輪を谷底近くまで構築している。やはり瓢箪池からの延びる谷筋の防御のためであろう。

<曲輪群C>

曲輪群Cは、曲輪群Dの西端から西側に延びる尾根に構築された10段程の小曲輪群（最大15×8.5m）で、秀吉本陣と陣城Ⅱを繋ぐ重要なラインである。

<曲輪群D>

曲輪群Dは、本陣西の緩斜面に設けられた曲輪群で、櫓台4から大手道までの間を幾重にも取り囲むように構築されている。斜面は、全体で27段もの曲輪で埋め尽くされているような感があるが、下に真っ直ぐに延びる2本の通路状遺構（幅3.2～3.7m）によって3グループに分けることが可能であろう。北端の曲輪群は7段の小曲輪（最大9.5×9.5m）で構成される。その段差は1mもない。真中（帯曲輪6直下）の曲輪群は全体的に狭長（最大51×8m）で、9段程度ある。南端の曲輪群は急斜面に構築されており、段差はあるものの全体的に狭長な形状（最大26×5.5m）を呈している。南端の曲輪群は、位置的に、曲輪群Iと共に大手道の防御を担っていたものであろう。本陣直下の曲輪群Dは数多くの雛壇状曲輪群で構成されているが、その機能については俄に判断できない。

<曲輪群E>

曲輪群Eは、本陣・曲輪群Dと陣城Ⅲを繋ぐ重要な曲輪群である。尾根に配置した曲輪群（最大30×13m）の南側に通路を設け、さらにその右下斜面に小曲輪群を構築しているのが特徴的である。通路の南斜面はかなり緩斜面となっており、広い曲輪（最大26×18m）を6段程配置している。土塁を利用した鉤状の虎口も見られるが、敵の東方向への回り込みを防ぐためであろうか、今後遺構の検討を要する。

<古墳群F>

F地区の谷部（流水がある）の東側に広い平坦面（65×35.5m）があるが、曲輪として普請された形跡は乏しく、13基からなる大型の古墳群と判断される（未計測）。しかし、この平坦面は栗谷から谷筋を通り太閤ヶ平へ至る重要なルートを押さえる位置にあり、陣城としての利用は行われたものと推察される。

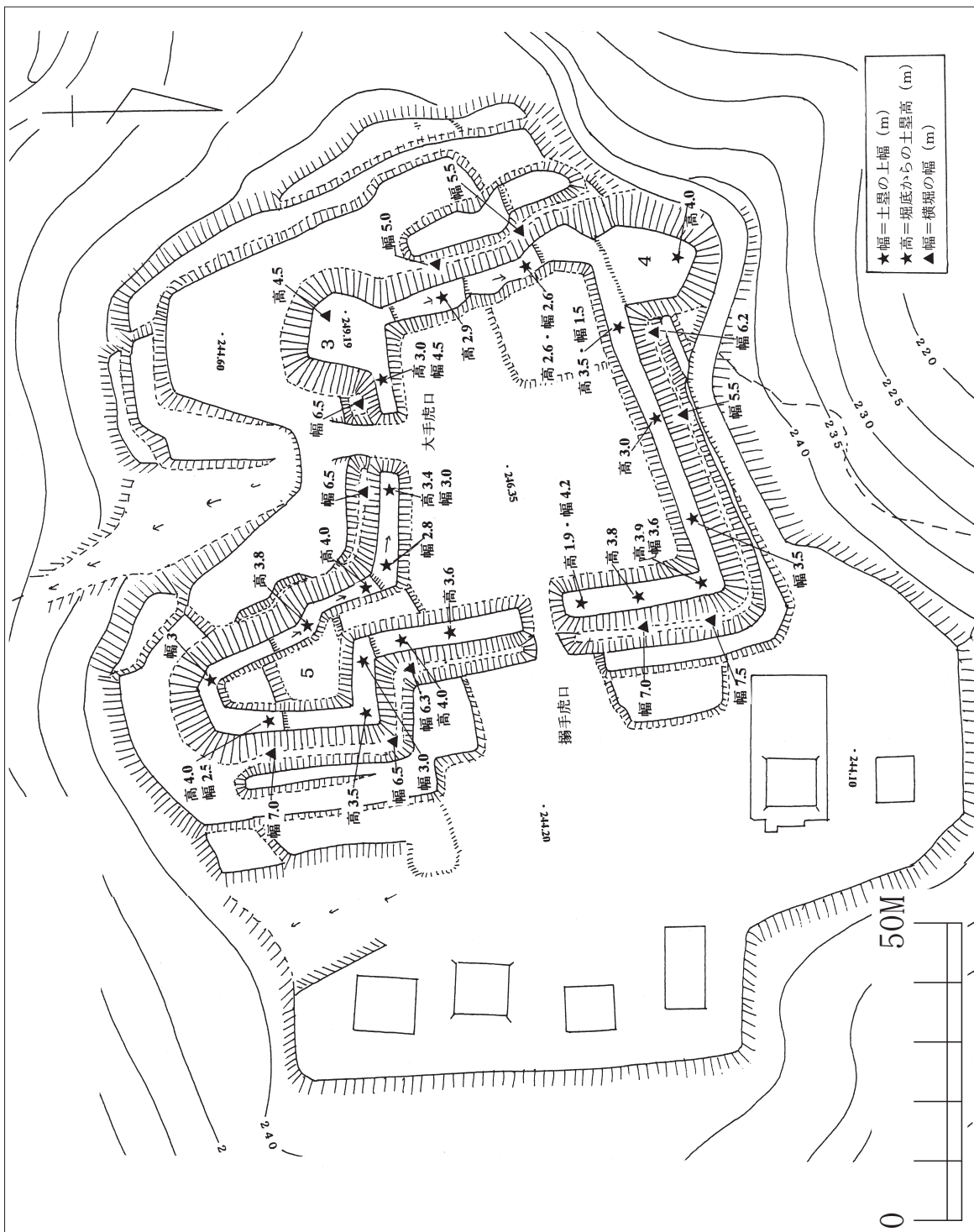
<曲輪群G・H>

曲輪群Gは、本陣背後を守備する重要な曲輪群である。前述したように、その曲輪群は無線中継所の位置する広い空間にまで広がっていた可能性はある。比較的広い緩斜面に遺構は存在するものの、2本の通路状遺構に沿って15段程度の狭長な曲輪群（最大33×6m）を配置しただけで、本陣背後を守備するには心許ない。

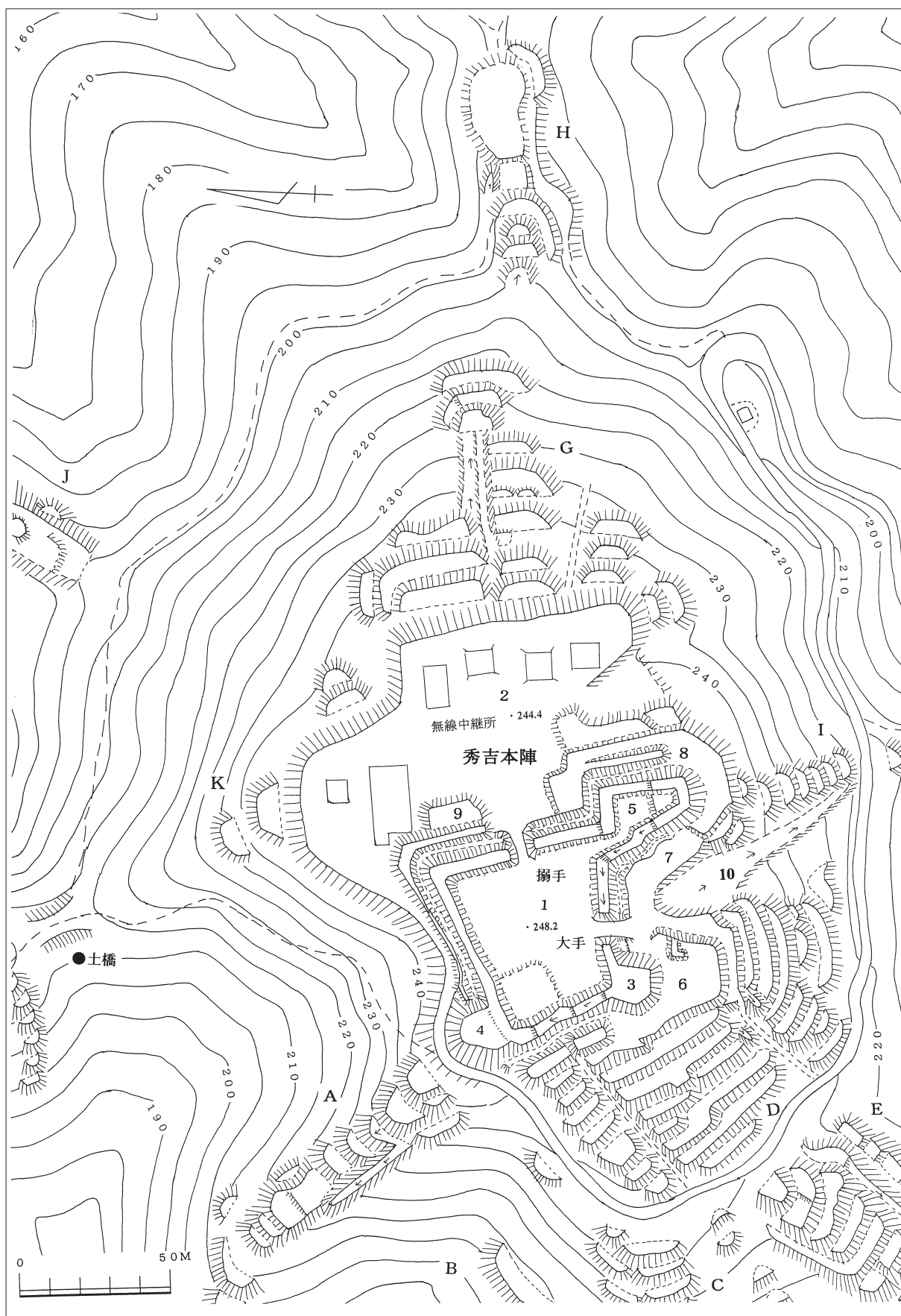
曲輪群Hは曲輪Gと共に、本陣背後の尾根鞍部に設けられた曲輪である。しかし、その曲輪は小規模なもので、削平も不十分である。この地区から北へ下りる道は「百谷の石敷通路遺構」に繋がっており、この削



第1図 太閤ヶ平本陣周辺の縄張図



第2図 秀吉本陣の土塁と横堀の計測値



第3図 秀吉本陣周辺の城郭遺構

平地は城郭遺構ではなく、何らかの宗教施設があった可能性もある。

何れにしても、曲輪群G・Hはとても本陣背後の防御に適した遺構とは認められない。

<曲輪群I>

曲輪群Iは、帯曲輪8から南方向に延びる10段程の小曲輪群（最大で12×4.5m）で、大手道を守備する遺構であろう。大手道は、本陣南虎口から西下斜面を通り、Iの尾根をF地区へ下り、さらに北東方向の谷筋を通して栗谷方向へと続いていたものと思われる。

<曲輪群J>

曲輪群Hから●土橋方向に道が通じているが、その中程に曲輪群Jがある。20×7mほどの削平地であるが、曲輪の中程の高まりは古墳と判断される。この道を通ると、山側に太閤ヶ平の位置する急斜面が迫ってくる。

<曲輪群K>

曲輪群Kは、●土橋を通り陣城Vに繋がる尾根に構築された2段の曲輪（17×9m、14×6m）である。尾根続きで鳥取城に繋がる尾根（通路）にも関わらず、曲輪は意外に少ない。「●土橋」は正確には、尾根鞍部を利用した「土橋状遺構」とでもいうべきもので、「●」は単なる表示記号である。土橋は、瓢箪池からの延びる谷と鉾山川から延びる谷が分岐する尾根鞍部に位置し、丁度自然の土橋を形成している（当時は切岸などの普請が行われていたかも知れない）。土橋に立てば即座に判明することだが、ここに堅固な城門を造作すれば、容易に鳥取城方向から侵入してきた敵兵を撃退することができる。

4. 陣城群の遺構

太閤ヶ平周辺の陣城群の特徴を、いくつかのグループに分けて報告する。

1) 陣城I・陣城Ⅶ（第4図）

<陣城I>

陣城Iは「伝羽柴秀長の陣」ともいわれ、鳥取城から尾根続きで太閤ヶ平へ至る通路上の最重要拠点に位置している。標高219m地点に土塁で囲繞した細長い主郭を構築し、その周りに小規模な曲輪群を配置しているが、何と言っても特徴的なのは、北西側と南東側斜面に普請した長大で大規模な堅堀群（畝状堅堀）の存在である。

主郭1は東西約27m・南北約20mを測り、北～東側にかけて折れをもつ低い土塁（幅約1.6m、高さ約1m）を設けている。曲輪2との間には、鉤状の土塁をもつ平入り虎口を構築している。土塁は幅4m・高さ0.7m、虎口の幅は3～3.5mを測る。曲輪2は東西約34m・南北約9mを測り、南側に土塁を構築し、北西側に虎口を設けている。曲輪3は東西約15m・南北約15mを測り、土塁の間に虎口（幅2m・高さ1.3m）を設けている。虎口の西端の土塁は円形を呈しているが、横穴式石室をもつ円墳を利用したものである。主郭部は曲輪1・2・3で構成され、曲輪3の虎口を大手、曲輪2の虎口を搦手と見ることが出来る。

土塁を持つ主郭1は、帯曲輪と横堀（幅1.6m・深さ1m）で二重に防御されている。そして帯曲輪からは大規模な堅土塁と大規模な堅堀Aが構築されている。堅堀Aの規模は、幅5.6～8.5m・深さ3～3.5m、長さ95m（斜距離）と長大である。堅堀イは幅4m、長さ35mを測る。堅堀ウは幅4m、長さ15mを測る。堅堀アの下には曲輪7（22.5×10m）があり、真中に仕切り土塁（幅4.3m、高さ1.3m）を構築している。曲輪7の地区には、岩盤を利用した小砦を設けている。堅堀アの東側には、10段程度の小曲輪を階段状に配置している。大堅堀Aは、小曲輪群を切って造成されているようである。

曲輪3から北東方向に、古墳を利用したような小曲輪が断続的に構築されているが、その尾根筋は太閤ヶ平へ至るルートでもある。変わった遺構としては、尾根鞍部（曲輪6）から北西方向に延びる谷部に、13段の雛壇状遺構（最大18×5m）が連続していることである。

曲輪2の南斜面は谷部となっており、曲輪4（43×11m）を除くとその規模は小さい。

曲輪3からは2つの尾根が派生しているが、西尾根には堀切（幅7.5m、深さ5m）・堅堀オ（幅2.5m・長さ27m）と5段の小曲輪を構築し、東尾根には堅堀エ（幅1.5m）を構築している。圧巻は堅堀オの下、谷部に構築された長大な畝状堅堀と堅土塁である。堅堀カは幅5～6m・長さ112m（斜距離）・深さ2～3m、堅堀キは幅8～9m・長さ112m・深さ4～5m、堅堀クは幅6～7m・長さ98m・深さ3

～4 mを測る。堅堀カ・キ・クはその上部の堅堀エ・オとは連続せず、新たに大規模な普請が行われたようである。従って、堅堀も新旧2時期の築造が考えられる。なお、この畝状堅堀は谷部を隔てて、陣城Ⅱの堅堀ア・イと繋がる。

<陣城Ⅶ>

陣城Ⅶは、自然地形を多分に残し削平の不十分な曲輪10と、その南側に構築された横堀・堅堀で構成される。堅堀ケは幅2.5～3 m・深さ1.6 m、堅堀コは幅4 m・深さ2～2.5 mを測る。陣城Ⅶは大規模な堅堀ラインの外側（西側）に位置し、陣城Ⅰの一部とも見られ、大規模な堅堀以前の古い遺構と判断できよう。

2) 陣城Ⅱ（第5図）

陣城Ⅱは、標高213 m地点の主郭1と帯曲輪を中心とする曲輪群と陣城Ⅰ・陣城Ⅲを連結する堅堀群で構成されている。

主郭1（10.5×21 m）・曲輪3（6×4 m）を曲輪4・曲輪2で構成する帯曲輪が取り巻き、そこから派生する北尾根には8段程の曲輪群（最大は27×16 m）を配置し、南西尾根には鉤状の土塁（高さ0.5程度）をもつ曲輪11（7.5×11.5 m）・曲輪12（6×10 m）と曲輪1を連結する曲輪10と大規模な堅堀ク・横堀（幅3.5 m、深さ1～1.5 m、長さ65 m）を配置している。

曲輪2と曲輪5の間には堅堀ア（幅4～5 m・深さ3～4 m）が掘削され、蛇行して谷部に落ちている。その全長は約63 m（斜距離）を測る。また曲輪2直下から堅堀イ（幅2.5～4 m）が構築されており、堅堀アと平行して谷部に落とされている。

曲輪12の西側は、尾根を二重の堀切で遮断し、そこから谷部に向かって直線的に大規模な2本の堅堀が構築されている。堀切Aは幅4.5 m・深さ2 m、堀切Bは幅5 m・深さ1 mを測る。また堅堀は長大で、堅堀サ・シ共幅3～4 m・長さ68 mを測る。堅堀サ・シは谷部までも横堀状（幅約3 m）に掘削され、陣城Ⅲの二重の堅堀に繋がっている。

なお陣城Ⅱには、長大な堅堀だけでなく、比較的規模の小さい堅堀も5条確認できる。堅堀エは幅3 m・長さ23 m、堅堀カは幅2.6 m・長さ20.5 m、堅堀キは幅3.8 m・長さ18.5 m、堅堀スは幅3.3 m・長さ23.5 mを測る。

長大な堅堀群と短い堅堀群とは、前者は新しく、後者は古いという時期差を考えることができる。

3) 陣城Ⅲ（第6図）

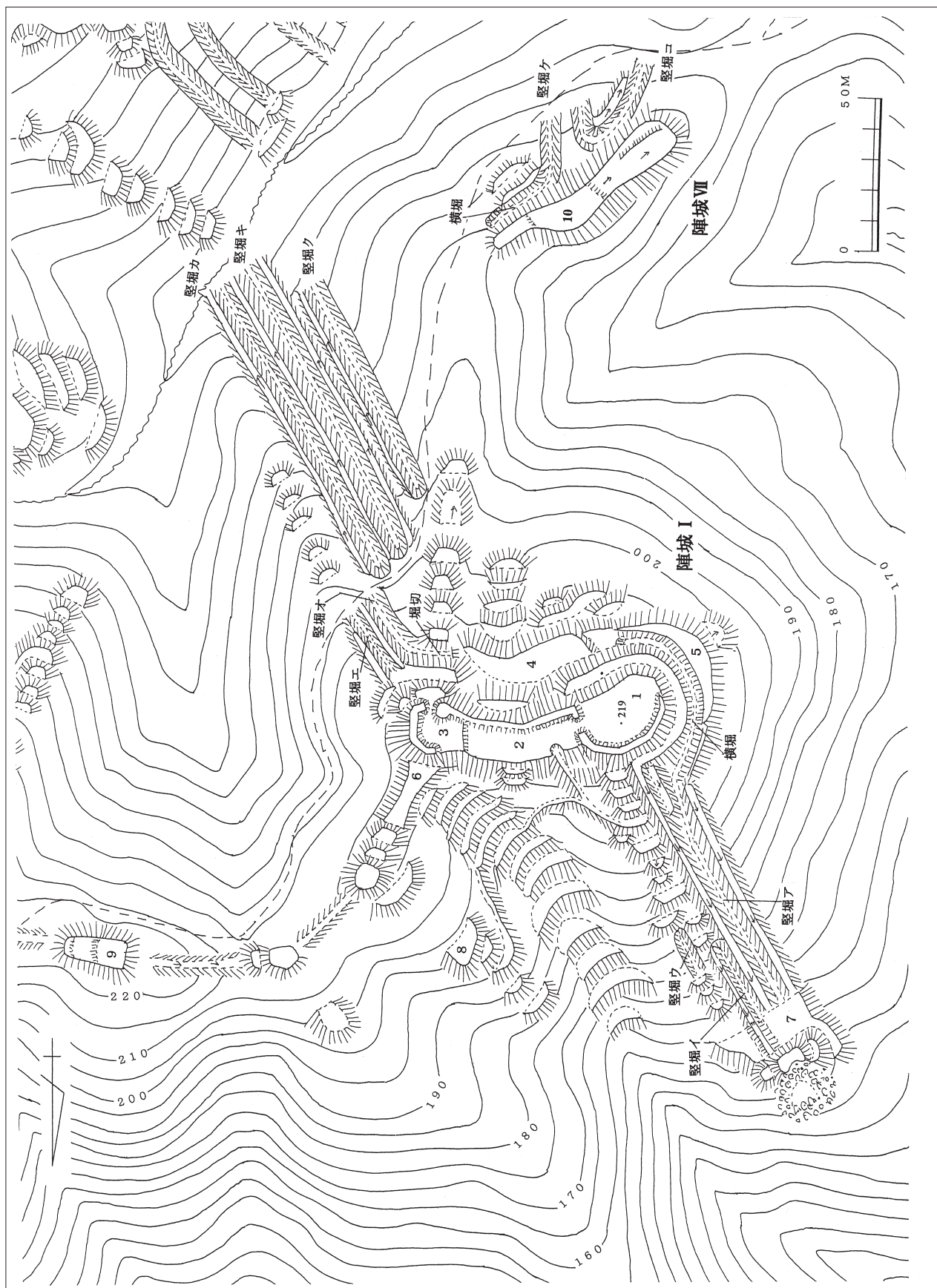
陣城Ⅲは本陣を守備する最終ラインの南端、標高187 mに位置し、北～西側に土塁をもつ主郭部（曲輪1・曲輪2）を二重の大規模な横堀と堅堀で防御された遺構である。主郭部は曲輪内の土塁も含めると、三重の防御ラインを形成していることになる。

曲輪1は東西45 m・南北14 mを測り、北側に折れをもつ土塁（幅3～3.5 m、高さ0.6 m）を構築している。曲輪2は東西28.3 m・南北19 mを測り、曲輪1から延びる土塁が（幅3～5 m・高さ1 m）北側から西側に構築されている。主郭部は曲輪1と曲輪2で構成され、曲輪の中程と南西端に虎口が開く。南西端の虎口は、堅堀エ・オを横切るような形で尾根筋を通り、曲輪6に繋がるようである。

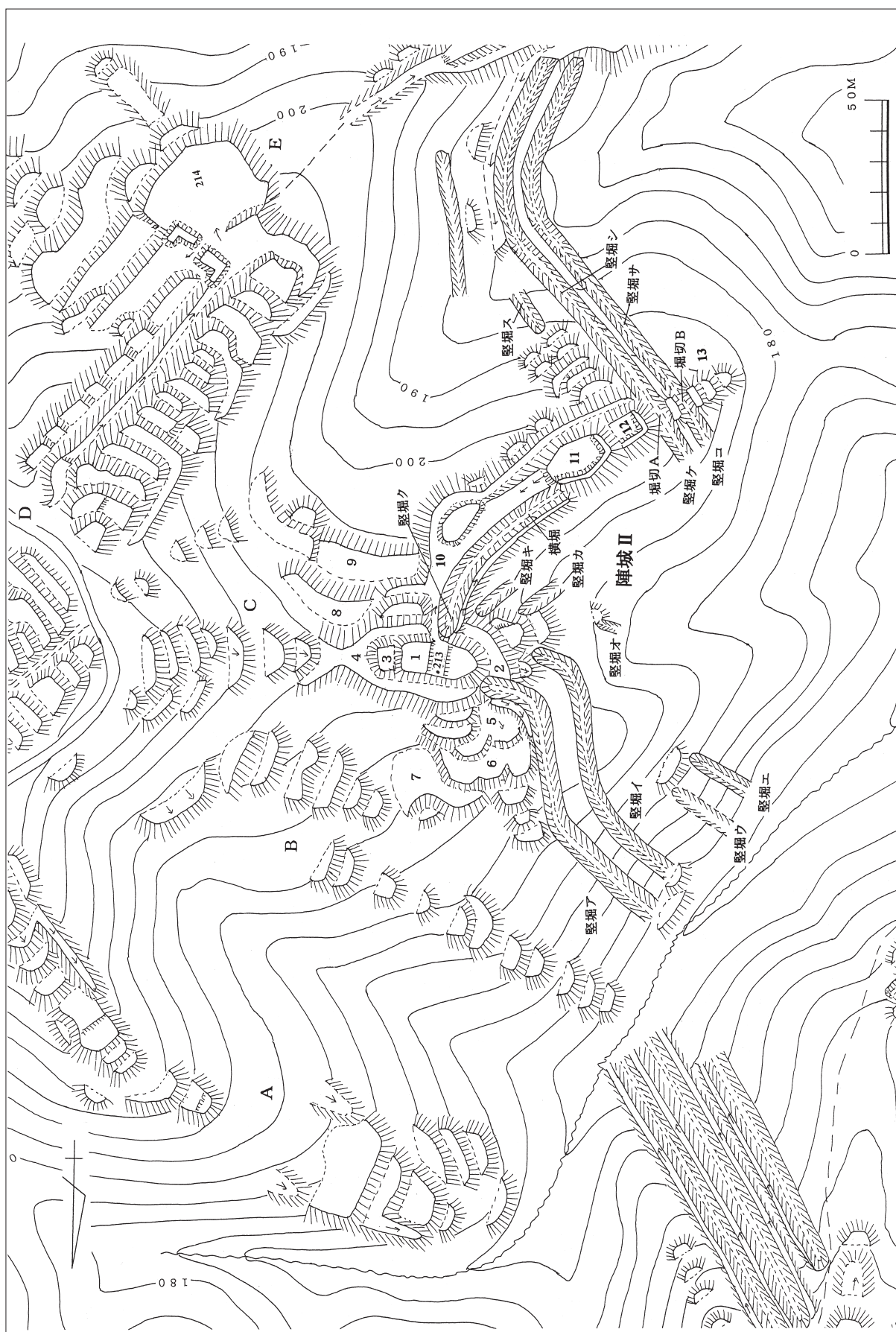
横堀は大規模なもので、横堀1は幅3.5 m・深さ3 m・長さ70 m、横堀2は幅3.3 m・深さ2 m・長さ75 mを測る。南斜面に構築された、堅堀エは幅3.5～4 m・深さ2 m・長さ41.5 m、堅堀オは幅4～4.5 m、深さ1.5～2 m・長さ47 mを測る大規模なものである。堅堀エ・オの東西には、曲輪7（31×14.5 m）や曲輪8（55×20 m）などの広い空間が構築されており、曲輪の在り方は主郭部とは大きく異なる。

横堀1から続く帯曲輪4を北東方向に進むと、陣城Ⅱの堅堀群に繋がる大規模な二重の堅堀ア・イが設けられている。堅堀ア・堅堀イとも幅3～3.5 m、深さ1～2 mを測り、長さは75 mもある。堅堀アの西側には、堅堀に沿って幅約3 mの通路状の曲輪が設けられている。堅堀ウは幅2.6 m・長さ49 mを測るが、大規模な堅堀とは時期差があるようである。

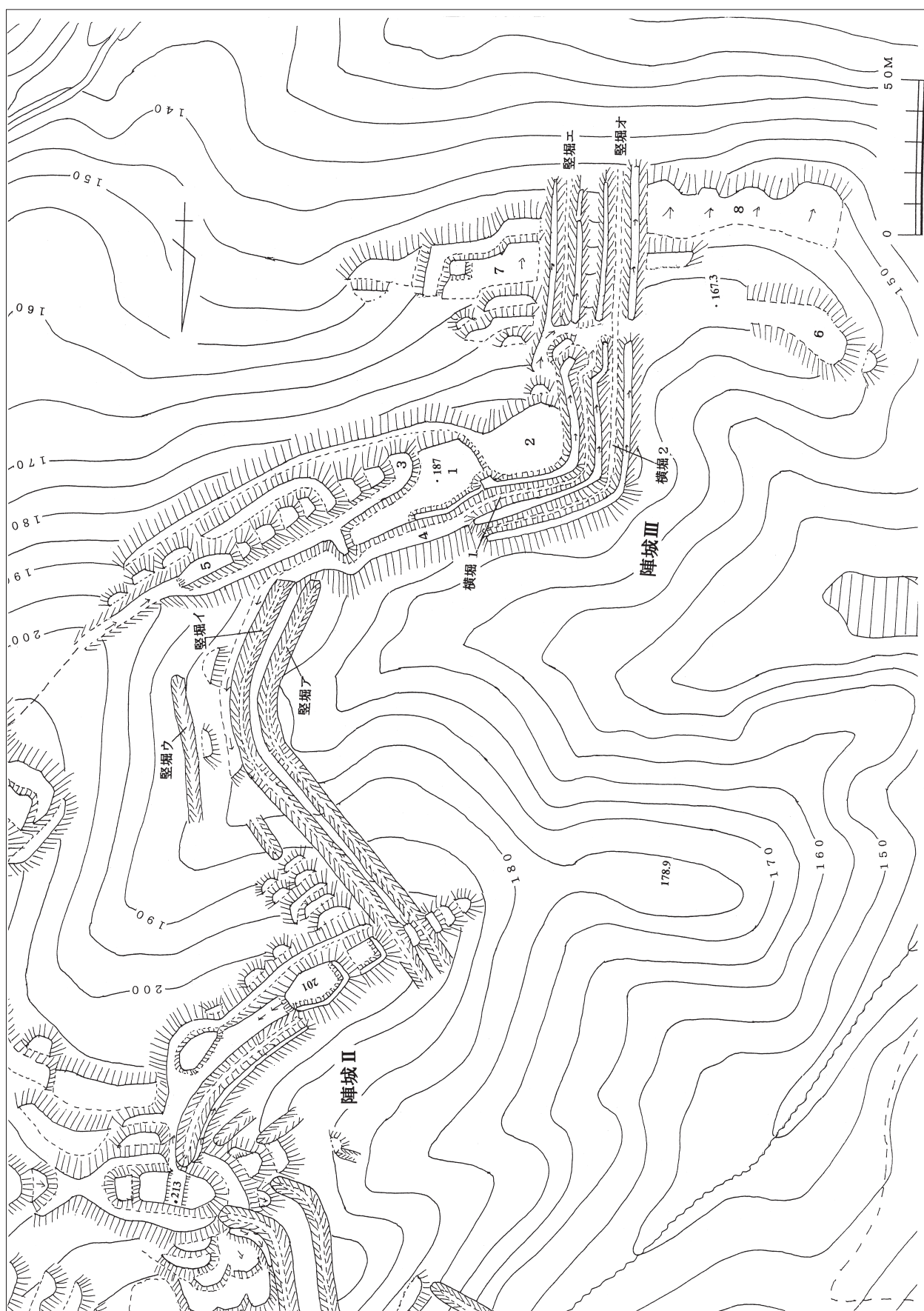
曲輪1北東側の尾根筋に構築されている小曲輪群（曲輪3～5、最大6.5×6 m）は機能的に明確で



第4図 陣城Ⅰ・陣城Ⅶの城郭遺構



第5図 陣城IIの城郭遺構



第6図 陣城II・陣城IIIの城郭遺構

はないが、北東側の遮断線を確保するためのものであろうか。

4) 陣城Ⅳ (第1図)

陣城Ⅳは、陣城Ⅰから本陣へ至る通路上に位置する繋ぎの城で、標高 234 地点に所在する。現在主郭は展望所となっている。主郭は 10×20 m を測る小規模なもので、北側に帯曲輪を巡らせ、南西尾根に 2 段、北西尾根に 4 段の小曲輪を配置している。土塁や堅堀・横堀などはなく、防御性に乏しい。在地の古いタイプの城と何ら変わらない。なお、陣城Ⅳから少し離れた南西尾根には、主尾根から谷部に向かって 16 段の小曲輪群 (最大は 7.5×6.5 m) を構築している。谷部の防御強化を図っていることが窺える。

5) 陣城Ⅴ (第1図)

陣城Ⅴも、陣城Ⅰから本陣へ至る通路上に位置する繋ぎの城で、標高 421 m 地点に所在する。その位置は、摩仁寺方向へ向かう交差点でもある。

城は、主郭 (10×11.5 m) に帯曲輪を巡らせ、そこから 3 方向に延びる尾根に小曲輪群を配置した単純な縄張である。北東尾根の曲輪群 (最大 9.5×22 m) は比較的広いが、削平は不十分である。土塁・堅堀などはなく、在地の古いタイプの城の縄張に似ている。

6) 陣城Ⅵ (第1図)

陣城Ⅵは標高 198 m 地点に所在し、栗谷からの谷を登り切った所に位置する。丁度、栗谷からの大手ルートを抑える城でもある。

主郭 (8.5×17 m) から 3 方向に延びる尾根に、曲輪群を配置しただけの単純な縄張である。切岸もそれ程シャープではなく、堀切・土塁・堅堀などは見られない。在地の古いタイプの城に似ている。

5. まとめ

以上、太閤ヶ平周辺の城郭遺構確認調査の結果を報告してきたが、若干の検討・指摘を行ってまとめたい。

- 1) 太閤ヶ平周辺の縄張図を作成して判明することだが、全体の城郭遺構の中で、土塁と横堀で囲繞された狭義の秀吉本陣と土塁をもつ陣城Ⅰ・陣城Ⅲの縄張が優れていることに気付く。特に、陣城Ⅰ・陣城Ⅱ・陣城Ⅲを連結する長大な堅堀・横堀ライン (「最終防御ライン」) は圧巻である。

土塁の規模に着目すれば、秀吉本陣の土塁が圧倒的に高大で、陣城Ⅰ・陣城Ⅲの土塁とは比較にならない。虎口の規模も、陣城Ⅰ・陣城Ⅲの虎口よりも秀吉本陣の虎口が傑出している。堅堀や横堀も、他の短いものと比較し、長大な「最終防御ライン」の普請が抜群に優れている。

- 2) このように考えると、曲輪配置からは、①土塁を持たない小規模曲輪群 (本陣周辺の曲輪群・陣城Ⅱの中心部・陣城Ⅳ・陣城Ⅴ・陣城Ⅵ) と、②土塁で囲繞し、虎口をもつ曲輪群 (陣城Ⅰ・陣城Ⅲの主郭部、陣城Ⅱの南曲輪) との間に時期差が想定される。

- 3) 堅堀についても、明らかに、短小な堅堀と長大な「最終防御ライン」の堅堀とは時期差を見いだすことが出来る。陣城Ⅰの短い堅堀と北西の大堅堀・南東の大規模な畝状堅堀とを比較すれば明らかであろう。また、陣城Ⅱの大堅堀は帯曲輪を切って普請されているし、陣城Ⅲの南の堅堀も横長の曲輪を切って築造されているようである。

因みに、陣城Ⅰから陣城Ⅲまでの堅堀・横堀の長さ (斜距離) を合算すれば、全長 680 m を測り、陣城Ⅰ主郭部と陣城Ⅲの帯曲輪を加算すれば全長 750 m にも及ぶ長大な防御ラインとなる。しかもその堅堀・横堀ラインを、丁度「屏風折れ」のように谷部を意識的に取り囲むように屈曲させているのも特徴的である。

- 4) 瓢箪池の谷部から東側の陣城 (陣城Ⅱ・陣城Ⅲ) は秀吉本陣に付随した縄張となっているが、鳥取城から尾根筋を通して直接攻撃にさらされる陣城Ⅰは、秀吉本陣の「出丸」的役割を担っていたものと思

われ、そのため堅固な普請を行ったものであろう。また陣城Ⅲも、本陣を南東方向から守備する城として、優れた縄張となっている。

- 5) 以上のように考えると、秀吉本陣は「太閤ヶ平」だけでなく、広義には「最終防御ライン」(陣城Ⅰ～陣城Ⅱ～陣城Ⅲ)を含めた範囲を考えるべきであろう。
- 6) 調査中いつも疑問に思っていたことがあるが、土塁囲みの秀吉本陣の東側の「広い空間」と西～南側斜面の無数の「小規模曲輪群」はどのような性格の遺構なのであろうか。『旧塁鑿覧』(岡嶋正義、江戸後期)や黒坂昌夫書状(昭和30年)の太閤ヶ平本陣図をみれば、やはり広い空間が「馬場」として描かれている。この「広い空間」は、馬場なのか将又秀吉本体(兵隊)の駐屯地なのか。また、「小規模曲輪群」は兵糧・武器などの保管場所なのか、兵の駐屯地なのか、その性格は明らかではない。各地の陣城遺構を比較検討しながら、その性格を究明していくことが今後の課題となる。
- 7) それにしても、鳥取城側(西側)の堅固な防御ラインに対し、秀吉本陣背後(東側・百谷側)の縄張の稚拙さには驚かされる。その理由は明らかではないが、本陣背後は既に秀吉の支配領域になっていた、としか考えようがない。
- 8) 筆者は昨年の『鳥取城調査研究年報・第2集』の中で、「このような陣城は一気に構築されたものではなく、用意周到に準備され、天正8年頃から時間をかけて普請された」ことを指摘したが、その思いは今回の調査でさらに深まった。遺構の時期差を天正8年と天正9年に分けて読み取るのかいいのかどうか、今後検討して行きたいと思う。
- 9) これまで述べてきたように、今回報告した「太閤ヶ平周辺の城郭遺構」は全国的に見ても傑出した陣城遺構であることは疑いない。特に狭義の秀吉本陣や「最終防御ライン」の堅堀・横堀群は、築城時期が特定でき、優れた縄張を有するだけでなく、歴史的文化的価値の高い遺産でもある。今後、この範囲を含めた国史跡の整備・活用が図られることを切に願うものである。